





バルザック全集

16

東京創元社

バルザック全集 第十六卷



昭和四十九年十二月二十五日 発行

訳者

鈴木力衛  
杉捷夫

発行所

東京創元社  
代表者 秋山孝男

(162) 東京都新宿区新小川町一―一六  
電話 東京(〇三)二六八―八三三一  
振替 東京 一五 六五

印刷・相馬印刷株式会社  
製本・株式会社鈴木製本所  
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

バルザック全集 第十六卷 目次

二人の若妻の手記・・・・・・・・・・五

第一部・・・・・・・・・・セ

第二部・・・・・・・・・・二七

骨董室・・・・・・・・・・三五

第一章 二つの客間・・・・・・・・・・三九

第二章 悪しき教育・・・・・・・・・・四七

第三章 ヴィクチュルニアンの門出・・・・・・・・二五

第四章 美しきモーフリニューズ夫人・・・・・・・・二九

第五章	シエネル、デグリニョン家の 危急におもむく	三〇三
第六章	地方の裁判所	三二六
第七章	予審判事	三三八
第八章	法廷の戦	三三三
第九章	身分ちがいの結婚	三四六

解 説	三五二
-----	-----

装 幀 松 田 正 久



二人の若妻の手記

鈴木力衛 訳



## ジュールジュ・サンドに

なつかしいジュールジュさま、これはあなたのお名前に新しい輝きをくわえるようなものではありません。が、あなたのお名前はこの本に魔術的な光を添えてくれるだろうと思います。わたしとしては、なにも欲得ずくや、謙遜の念から言っているではありません。二人で旅行するときも、会わないでいるあいだも、お互いの仕事や、世間の意地悪さなどとは関係なしにつづいてきた本当の友情を、こうして証拠だてて見たいのです。このような気持はきつといつまでもかわりありますまい。自分の作品に親しい友の名前を添えるのは、さまざまな心配ごとの中の一つの楽しみをまじえるというものです。心配ごとと積り積るとやはり苦痛をともしなわなわけではなく、たとえばわたしがむやみに書き散らすのが気に喰わぬという非難だけで、大へんな教にのぼっています。ところで、わたしの前に横たわっている世界はもつと豊かなものではないでしょうか。ジュールジュさま、他日、失われた文学の故実家が、こうしてつらねた名前のなかに、高い文名、高貴な心情、清らかなにして純な友情、この世紀の光輝ばかりを見出してくれたら、どんなにか快いことでしょう。つねに議論の余地の残された成功を誇るよりも、この確かな幸福により大きな誇りを持つべきだと思います。あなたをよく知っている人びとにとって、いまわたしがするように、自分をこんなふうと呼ぶことができるのは、一つの幸福ではないでしょうか？

パリ 一八四〇年六月

あなたの友 ド・バルザック

第  
一  
部



ルイズ・ド・シヨールニューより

ルネ・ド・モーコンプへ

パリ 九月

おなつかしい牝鹿さん、とうとう出てしまいました。あたしも！で、もしあなたがプロア宛てにお便りをくださらなかったとすると、手紙の上で楽しくお目にかかるという、あのお約束は、あたしのほうが一足先にすますわけですのね。あたしの最初の便りに吸いよせられたあなたの美しい黒いおめを上げて、初恋を打ち明ける手紙のために感嘆の言葉をとおいていただきたいのですわ。誰もが初恋初恋って言いますけれど、してみると二度目の恋と

いうのもあるのでしょうか？「お黙んなさい！」と、あなたはおっしゃるでしょう。「それよりも、誓願のお式をするはずになっていたあの修道院を、どうして出たのか、そのお話をしてくれよう」と、おいつけになることでしょう。ルネさん、カルメル会の修道女たちになが起ころうと、あたしが自由の身にされた奇蹟ほど自然なものはございませぬ。恐怖にとらわれた良心の叫びが、ついに頑固な攻略の掟に打ち勝ったまでですわ。それだけの話なんですの、伯母さまはあたしが胸を悪くして死ぬのはいやだというので、ママを説き伏せてくださいました。ママは新参尼になりさえすれば病気なんかおってしまおうと、口癖のように申しておりましたけれど。あなたがお出になってから、あたしがひどく憂鬱になったので、かえって思ったより早く、うまく片がつきました。あたしはいまパリにいます。そしてここにいられるのは、ひとえにあなたのおかげだと思つています。ねえ、ルネさん、あなたに別れて、ひとりぼっちになった日のあたしをごらんになったら、あなたは一人の娘の心に、これほど深い感情を植えたことを、誇らしくお思ひになったことでしょう。あたしたちはいつも一緒に物思いにふけり、二人だけで羽根をのびし、二人っきりの生活をしてきました。そのために、あたしたちの心は、ポーヴィザージュ先生（ポーヴィザージュ）が話してくださったあの死んだ二人のハンガリー娘のように、お互いにしっかり結びつけられてしまったように思われます。ポーヴィザージュ先生といえは、まったく名前と

は似ても似つかないかたでしたわね。修道院のお医者さんとして、あれほど打ってつけの先生ってありませんわ。あたしが病氣になったとき、あなたも一緒に病氣におなりにならなかったこと？ あたしは暗い絶望の底に沈みながら、あたしたち二人を結びつけるきずなの一つ一つに、いまさながら気づかずにはいられてませんでした。それが、別れてしまうと、もうお終いになったような気がしました。仲を裂かれたきずばとみたいに、生きているのがいやになったのです。死んだらどんなにいい気持だろうと思いました。きつと心静かに死ねたにちがいありません。ひとりぼっちでプロアのカルメル会の修道院に残されて、怖れおののきながら、しかもド・ラ・ヴァリエールさん(四世の寵姫。国王の寵がモンテスマン夫人に移つた。晩年をカルメル会の修道院にすす)や、あたしのルネに序誦もしていただかないで、誓願の式をするなんて！ それじゃ病氣にもなりますわ、死ぬほど病氣になりますわ。一時間ごとにお勤めや、お祈りや、お仕事などをくり返すあの単調な生活、いつもいつも同じなので、どこにいても、カルメル会の修道女は昼間の何時、夜の何時になにをしているか、言えるほどですわ。あたしたちのまわりのものが、あろうとあるまいと、いっさいおかまいなしのあの怖ろしい生活、それもあたしたちにとってはほんとに変化に富んだ生活でしたのね。あたしたちの夢を追う心には制限がありませんでした。想像力のおかげで、あたしたちはこうした王国の鍵を手に入れました。あたしたちはかわりばんに、お互いのかわいらしい馬ポフ体ポフ鷲頭ポフの怪物になったこと

ね。目のさめたほうが眠ったほうを起こし、あたしたちの心は、見てはならないと言われた世界のものを、われ勝ちに手に入れて、喜び合いました。あたしたちにとっては、「聖者列伝」さえも、一番秘密なものをわからせてくれる手引きになったではありませんか！ なつかしいあなたが行ってしまった日、あたしはあたしたちの眼に映っていたカルメル会の修道女みたいになりました。新しいダナイード(ダナウスの五十人の娘。父の命によって結婚の夜、それぞれにその夫を殺し、そのために底のない樽に水を汲みこむ罰を受けた)になったのです。そして底のない樽に水をみたくわりに、毎日毎日、どこかの井戸からか、いっぱいになった桶を引き上げるつもりで、空の樽ばかりを引き上げていたのです。伯母さまは、あたしたち二人の心のなかの生活をご存知ありませんでした。修道院のニアルパンの土地を神の国としていらっしやる伯母さまは、あたしがなぜ生きているのがいやになったか、説明してはくたさいませんでした。ねえ、ルネさん、あたしたちの年頃で教えの道に入ろうと思ったら、心の底から素直になるか（これはあたしたちにはできない相談です）、さもなければ、伯母さまのように、熱心に神さまに身をささげて、聖ホライい聖ホライい人にならなければなりません。伯母さまはかわいくってたまらない一人の弟のためにご自分の身を犠牲になさいました。でも知らない人や、思想なんかのために、自分を犠牲にできる人があるでしようか？

ここ二週間ばかりというもの、あたしは馬鹿な言葉をおさえついたり、考えごとを胸のなかに隠したりしていま

す。あなたにだけしかお伝えできない見聞きしたこと、あなたにだけしか言えないお話などがいっぱいあるので、あの楽しいおしゃべりのかわりに、こうして手紙で打ち明け話をするのは、ずいぶんつまらないことですが、これでもなかつたら息がつまってしまいそうです。心の生活があなたたちにはせひとも必要なのです！　あたしはけさ、あなたもお始めになったのだと思って、日記をつけ始めました。もうしばらくしたら、あたしはあなたの美しいジエムノスの谷間(エルセ)で暮らすことになりすのね、その谷間のことはあなたが話してくださいただけのことしか知らないのですけれど。そしてまたあなたはバリへ来てお暮らしになるわけね、あたしたちが描いた夢のなかばかりでしかご存知のないこのバリへ。

さて、ルネさん、ある朝のことでした、この日はあたしの生涯のうち、バラ色のしおりで記念すべき日ですわ、パリから付添い女と、お祖母さまの一番最後の従僕のフィリップとが、あたしを連れ戻しに来てくれました。伯母さまがあたしをお部屋へ呼んで、このお話を聞かせてくださったときは、うれしくてうれしくて、もう声が出ませんでした。あたしはぼうっとしたまま、伯母さまを眺めておりました。

「ルイズさん」と、伯母さまは例ののどにからんだ声でおっしゃいました。「あなたはべつに淋しいとは思わないでわたしのところを出てゆきますね、わかっています。でもこのお別れは最後のお別れじゃありませんよ、いずれその

うちにまた会うことになるでしょう。神さまはあなたのひたいに、選ばれた人びとのしるしをおつけになっていきます。あなたは誇り高い心を持っていますから、天国へも地獄へも行けるのです、でも地獄へおちるにしたらは氣品がありません！　わたしはあなた自身よりもあなたのことをよく知っています。あなたはありふれた女たちのように、むやみに情熱を燃やしたりするもんですか」

伯母さまはあたしをやさしく引きよせて、ひたいの上に接吻なさいました、あたしはひたいに熱を感じました。伯母さまをむしばむ熱、その蒼いお眼をくろくし、まぶたに淋しい影をやどし、金色のこめかみにしわをよせ、美しいお顔を黄色っぽくした熱。あたしは身の毛もよだつ思いでした。お返事をするまえにあたしは伯母さまのお手に接吻いたしました。

「ねえ、伯母さま」と、あたしは申しました。「伯母さまにこれほどご親切にしていたのに、この修道院はあたしの中からだによくありませんでしたし、心をやわらげてもくれませんでした。だとすれば、こんど帰ってくる時には、さんざん涙を流すと思いますわ。そしたら伯母さまも、あたしが戻ってくるのを望みにはなりませんまい。あたしは、あたしのルイズさまに捨てられないかぎり、ここへ帰って来たくないんですの、そして、もしそんな脇方をつかまえたら、死ぬまで別れないつもりです！

モンテスパン(ルイズの四世)なんか、あたしちつともこわかありません」

「さあ、お馬鹿さん」と、伯母さまはほえみながらおっしゃいました。「そんなうわついた考えはここに残して行かないで、みんな持つて帰るんですよ。それに、あなたはモンテスパンより、ド・ラ・ヴァリエールに近いくことを、よく覚えておきなさい」

あたしは伯母さまを抱きしめました。お気の毒な伯母さまは、とうとう馬車のところまであたしを送ってくださいました。そしてご先祖さまの紋章とあたしとを、かわりばんにじつと眺めておいででした。

ポージャンシー(ロアル河のそばにある町)まで来ると、とっぷり日が暮れました。あんな妙なくあいにお別れした感じでしょう。あたしは心のなかがすっかり麻痺したような感じでした。あれほど待ちこがれていた世の中へ出て、なにが見られるのでしょうか？ 最初、着いたときには、誰も出迎えて来てくれませんでした。ママはブローニエの公園へ、パパは参事院へお出かけになっていました。兄のレトレ公爵は、晩御飯のまえに着がえをするときでなくちゃ、決して帰ってこないとの話です。

ミス・グリフィス(このひとはほんとに爪をのびしています)とフィリップが、あたしのアパルトマンに案内してくれました。

このアパルトマンは、あたしの大好きなお祖母さま、ヴォーレモン公爵夫人のものなのです。お祖母さまは、あたしにいくらか財産を残してくださいださったんですが、このことは誰もあたしに教えてくれませんでした。話のついでです

から、思い出のこもったこのお部屋にはいったときの、あたしの悲しい気持を、あなたにも味わっていただきたいんです。アパルトマンはお祖母さまがお残しになったままになっていました。あたしはお祖母さまが亡くなったベッドの上へ横になりまいました。長椅子の端にすわって、あたしはそばに人がいるのも忘れて、さめざめと涙を流しました。そして以前にはよくこの場所で、お祖母さまのお声がすこしでもはつきり聞えるように、そのお膝元に坐ったことを思い出しました。そこから、赤っぽいレースに埋まったお祖母さまのお顔を眺めたものです。そのお顔は、死病の苦しみとよる年波とで、すっかりやせて見えませんでした。このお部屋はいまだにお祖母さまの熱で温まっているような気がします。アルマンド・ルイズ・マリー・ド・シヨリー嬢ともあろうものが、百姓娘のように、母親が亡くなったほどその日から、そのベッドでやすまねばならないなんて、いったい、どうしたことなのでしょう？ 公爵夫人が亡くなったのは、実際は一八一七年のことですが、あたしには、ついきのうのこのように思えます。あたしの眼には、このお部屋にあってはならないものが、いまだに残っているのが見えました。国家の仕事におわれる人たちは、自分の身内の人間にひどく冷淡で、そして、ひとたび死んでしまえば、十八世紀の婦人のうちで一番名前売れたあのお祖母さまのことさえ、誰もろくろく考えてくれなかったのが、あたしにははつきりわかりました。フィリップにはあたしがなぜ涙を流したか、どうやら

察しがついたようでした。フィリップは、お祖母さまが遺言で、その家具をあたしにお譲りになったのだと申しました。パパはまた、大きいほうのアートルマンも、革命で荒されたままにしておいたのです。あたしが立ち上がると、フィリップは、お客用のアートルマンに面した、小さいサロンのドアを開けてくれました。すると、むかしながらの荒れ果てたさまが目に映りました。りっぱな絵のかかっていた扉の上方は、空っぽの継壁になっており、家具はこわい階段を登り、このうら淋しい上のお部屋を横切るのがあたしにはこわかったものでした。公爵夫人のところへ行くときには、あたしは大階段の天井の下を降り、お化粧室の秘密の扉のところへ出る、小さい階段を通ることにしておりました。

サロンと、寢室と、あなたにお話しした朱と金色の美しい小部屋とでできたこのアートルマンは、癡兵院の側の離れを占めています。館と大通りとのあいだには、ただただでおおわれた壁と、すばらしい並木路があるだけです。その茂みは大通りの歩道のにれの茂みとまじり合っています。金色と青の円屋根、それに癡兵院の灰色の大きな塊がなかったら、森のなかにでもいるような感じです。この三つの部屋の建築様式といい、またその場所といい、要するにシェーリー家の公爵夫人たちがみえを飾るためにでき上がった昔風のアートルマンで、公爵がたのアートルマンは反対側の離れにつくらねばならないことになっていま

す。両方とも館の二つの棟と正面の離れとで適宜にへだてられています。正面の離れのほうには薄暗い、大げさな感じの広い部屋があるのですが、フィリップがあたしに見せてくれたところでは、子供のころ見たとおり、むかしのはなやかさは依然として跡を絶っています。あたしのびっくりしたような表情を見てとると、フィリップは、打ち明けた話をしたそうな顔つきをしました。ルネさん、こうした外交官の家では、誰もかれもが分別臭くて、神秘的なのです。フィリップはそこで、亡命貴族の財産補償の法令が出るのを待っているのだ、と教えてくれました。パパはその賠償金が出るまで、うちの修繕を延期しているのです。王室づきの建築師は、その額を三十万リーヴルに見積ったと申します。このような打ち明け話を聞いたあたしは、またもサロンの長椅子にすわりこみました。おやおや！ パパはそのお金を、あたしを結婚させるためには使わないで、あたしが修道院で死ぬのを黙って見ていようというつもりだったのかしら？ ねえ、ルネさん、あたしはどんなにあなたの肩に顔を埋めたかったことでしょう！ お祖母さまがこの二つのお部屋で元氣にお暮しになっていたところが、どんなになつかなかったことでしょう！ お祖母さまはもうあたしの心のなかにしかいらっしやいませんし、あなたは二百里も離れたモーコンプにいますもの、あたしをかわいがってくれるひと、かわいがってくれたひとはこの二人だけしかありません。若々しい眼をしたあのお婆ちゃん、あたしの声で目をさましたとおっしゃっていました。お



互によく話が合ったんですのね。悪い出にふけていると、ふいに最初の気持がかわって来ました。神聖さをけがすように思われたものが、いかにもきよらかに見え出ししました。ほのかにただよっている元帥夫人の粉白粉の香りを嗅ぐのも快く、白模様のはいた黄色いどんすのカーテンのかけに眠るのも快く感じられたのです。お祖母さまの眼ざし、お祖母さまの吐息は、そこにご自分の魂のなにかを残していらしたにちがいありません。あたしはフィリップに、こうした品々がもとのままの輝きを取り戻すよう、あたしのアバルトマンにこのお部屋独特の雰囲気を生かすよういいつけました。あたしは自分の手でどの家具をどこへおくかを指し示して、どんな風に住みこなすつもりかを呑みこませました。一つ一つの物を手にとって調べながら、

大好きなこれらの古い美術品を、どうしたら若返らすことができるかを教えました。お部屋の色は白ですが、時代がついて幾分くすんでいます、面白いアラベスクの金もところどころ赤い色調を帯びています。でもこのような色合いは、お祖母さまがルイ十五世陛下からいただいたサヴォンヌリー(一六六五年、セヌエ河のほとりに建てられた王室づきの織物工場。一八二八年にゴブラン織の工場と合併された)の絨毯の古びた色や、陛下の肖像画とよく調和がとれています。掛時計はサックス元帥の贈りものです。暖炉のところにある陶器類は、リンネリー元帥から来たものです。二十五歳のときに描かせたお祖母さまの肖像画は、卵形の額縁にはいつており、王さまの肖像画の正面に掛かっています。公爵の姿は影も形もありません。お祖母さまの気持の

よい性格がはつきり出ている、こうした偽りのない、さっぱりした忘却ぶり、それがあたしは好きなんです。お祖母さまが重態におなりになったとき、告解師は、サロンに待っている公爵をお部屋に入れるようすすめました。「お医者さまとお許しがあるのなら」これがお祖母さまのご返事だったのです。

ベッドには天蓋があり、毛糸を詰めた背凭せいでんせががついています。カーテンは美しいたっぶりしたひだで巻き上げられています。家具は金色の木材でできており、白い花模様のついた黄色のどんすをかぶせてあります。このどんすは窓のところにも掛かっており、もくめのように見える白絹の地で裏打ちがしてあります。扉の上方は、誰が描いたのかは存じませんが、日の出と月の光の絵になっています。暖炉のつくりかたは、これまたおそろしく凝ったものです。どうやら、十八世紀の人たちは、長い時間を暖炉のそばで暮らしたように見受けられます。さまざまな大事件がそこに起こったのでしょう。金メッキをした銅のかまどは彫刻の傑作ですし、かまらの仕上げは気品があつて優しく、十能や火挟みの細工は甘美そのものですし、ふいごは宝玉さながらというところですよ。ついたての綴織はゴブランの工場からきたもので、その刺繍の品のいいこと。台の上支えの棒や縁えりの枠の上にはいっばいについている風変わりな模様は、見ていてうっとりするほどです。そのすべてが扇のように細工がほどこしてあります。お祖母さまがほんとに大切にいらしたこの家具を贈ったのは、いったい誰なの